
異世界への迷人

Siba

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界への迷人

【Zコード】

Z6614Z

【作者名】

Siba

【あらすじ】

ある日、突然異世界にいた修哉。そこは魔法が発達し、科学が未発達という場所だった。元の世界に帰るため、一緒に異世界へ行ってしまった仲間と共に修哉は行動する。

遠慮なく厳しいことをビシバシと語ってくれてかまいません。
よくあるファンタジーものです。

プロローグ

夕暮れで赤く染まる空。

その下に完全武装した兵士複数人と男が2人。

一方の男は悲しみとも余裕ともとれる表情を浮かべ兵士に今にも連行されようとしている。

またもう一方は、兵士に羽交い絞めにされ身動きをとれず、ただ大声で怒鳴っている。

「お前ら！ 康一をどうするつもりだ！？」

心の底から声を絞り出す。

長く続いた『大戦』に終止符を打つたはずの康一。

彼が、仲間だと信じ共に行動してきた友軍に連れて行かれる。果てしなく続くと思われた戦争。

その戦争を終わらせるため、康一は数人の仲間と共に（その中には俺も含まれる）敵陣深くへ突撃し、敵の大将を討つた。

そのはずなのに、連行されていく。

「彼は無形軍の大将に止めをささず、封印を施し、いざれ復活させようとした疑いがかけられている。」

康一を連れて行こうとしている兵士の一人が無機質な声で言った。

そんなわけはない。俺の目の前で無形軍の大将を討つたのは、紛れもない康一だ。

自軍からも死者が大量に出た、あの乱戦のなかで、康一には封印を施す必要も、理由も、余裕もない。

そもそもそんな第一級戦犯者のようなことをしたら死罪は免れない。

「康一はそんなこと絶対にしていない。俺はずっと共に行動して

いたが、そんなそぶりは無かつた。「

もう何度もかわらない反論。

「それが本當かどうかは私達が調べること。」

ずっとこのような調子だ。さつきから反論は全て一蹴されてくる。

「待つていてくれ。すぐ戻つてくれる。」

康一がつぶやくのが耳に入った。

「待つ？ 何をだ？ 康一・・・。お前が死ぬのを、か？」

お前もあいつと同じでこんなところで死ぬのかよ。」

「そうじやない。俺が無罪放免となるのを、だよ。」

まだ死ぬと決まつたわけじやない。それなら俺はあいつとの友情に賭ける。」

それは危険すぎる賭けだ。第一に國家権力を友情で曲げる」とはできないだろ?」

第一に・・・

「俺らをこんな田に合わせたのはあいつだぞ。それなのに・・・あいつとの友情にかけるのか？」

「ああ。俺は信じている。」

その声からはつきりと決意を感じられる。

「待つて・・・いるからな。元の世界に帰れる田を。」

「心待ちにしてな。」

会話はこれで終わった。いや終わられれた。

康一が兵士に連れて行かれたのだ。

もう後は信じるしか無い。

康一が戻つてくるよつ。また笑い会える田が来ると。

狂ったように俺は祈り続けた。賭けの勝率が少なすぎる。俺はすでに1人失っている。

これ以上何かを失おうものなら、頭がおかしくなるかもしれない。

「頼むから、生きて帰つてくれ・・・。」

小さな咳きを幾度、漏らしたことか。

言つて願いがかなうなら・・・と幾度、願つたことか。

数日後。

城下に配られた新聞。

そこには、大戦終結の4文字と、
・・・・ 戦犯処刑の4文字。

望みは碎かれた。

俺にはなにが残つているんだ？

あいつを死なせ、今また康一を失つた。

誰が原因・・・？

誰のせい・・・？

誰が悪い・・・？

・・・あいつだ。

俺はあいつを絶対に許さない。

俺は絶対に復讐を成す。

そのためにこの手が人間の血で汚れても・・・。

一面の緑。

「空が見える・・・」

地面に仰向けに倒れ、空を見上げている自分がいた。

つい先ほどまで俺（真島修哉）は白い壁で囲まれた教室で退屈な授業を受けつつ、窓の外の桜を見ていた。

桜前線が5月頃通過する北海道は、

5月病でやる気の出ない時期と同時期のため、授業中、桜を見て暇をつぶすことができる。

それが一変、今は森の中にはいる。

何故か？そんなことはわからない。

わかっているのは、自分が今、どこにいるのかわからないところだけ。

目を覚ましたらここにいた。

もしかしたら夢か・・・？

もしそうだとしたら異様にリアルな夢だ。

夢って露がかかつて細部まではわからないものだと思っていた・・・。

木々のざわめき。鳥と虫の鳴き声。視界の中心が空。その周りに一面の木々。前に家族で、キャンプに出かけた時に見たような光景。

ただ、キャンプ場と違い、人のざわつきは聞こえない。

それに北海道の風の肌寒さと違い、この森に吹く風はとても温かい。気持ちいい。

やばい。起つてしまつ。

でも睡魔に身を任せ寝ている内にこの夢が覚めるかもしれない。

でも夢の中で寝るつてどうこうことだ?

しばし悩んだ後、

それはそれでいいだらう。ところづ結論に達し眠ることに決定。

空を見ていた目を閉じ、睡魔に身をさせて・・・

眠らうとした時、

「起つきろーーー！」

声と共に鳩尾に「ゴスツ」という衝撃。腹部がショイクされる。
脊髄反射で手が腹部を覆う。食後だつたら一体どうなつていたこと
やら・・・。

「つて殺す氣かっ！」

体を飛び起こし衝撃の主を睨む。

その姿を見たとたんに、俺は・・・

・・・不覚にも見とれてしまった。

「いいじゃない。人間、それくらいじゃ死なないわよ。」

声の主は、女性だつた。いや少女といつほつが正しいかもしね
い。

満面の笑みでこっちを見ている。

年は俺と同じくらいか。俺と同じ制服をきている。背は女子として
は平均で。絵に描かれているかのように整つた顔。肩より若干長い
金色に輝く髪。世の中の汚れを全く知らないと言わんばかりに輝い
ている瞳。肌は雪のように白く艶があり、といふどいろピンクに色
付いている。

正直、とてもかわいい。

そして・・・腕を僕の腹の上に突き立てていたらしい。

・・・とつとつ俺は、『森で美少女に会う。しかも二人きり。』といふぐくりイベントを体験してしまったのか。

直後、それが夢であることに気付き、一気に嬉しさが萎む。しかし今は、そんなこと考えていられる場合ではない。首を振り煩惱を追い払う。

「死ななくとも相当痛いんだよ！」

煩惱消滅と共に鳩尾の痛みが戻ってくる。

正直かなり痛い。

ん？ 何かがおかしい。少し考えてみよう。
これは夢のはずだ。

ならなぜ・・・なぜ腹部への衝撃と痛みが・・・？

そこから導き出せる結論。

「夢じやないのか・・・？」

「なに言つてんの？ 痛いのあとに夢じやないってどんな思考回路してるので。」

金髪美少女が罵倒していく。

いつたいこいつ何なんだ。名前も知らない女に鳩尾殴られたのなんて初めてだぞ。

「あの、すみません。出会つて早々、倒れている他人の鳩尾を殴つたあなた様は誰ですか？」

嫌味たっぷりで尋ねる。

「え？ あたしは綾よ。まさか知らなかつた？ついでにあなたの名前は？」

嫌味効果なし・・・。

それにしても綾つてどつかで聞いたことあるような気が・・・？

！ 確かクラスのやつが言っていたな。

清水綾・・・成績優秀、温厚、優しい、かわいい・・・つまりパーエクト。

絶対違うな。名前が同じでかわいいところしか一致しねえ。
いや、成績はしらないけど・・・

そんな別人のことは置いておいて何でこいつの『名前を知っているか』に『まさか』がつくのか、とか、俺の名前はついでかよ、とか
言いたいことは沢山あるが名前を聞いた以上こっちも名のらなければ
ならない。

「俺は真島修哉だ。ついでにお前のことは知らない。」

「はあ？ あたしの名前知らないなんて状況分析できないんじやないの？」

出会いつて5分。険悪な関係の完成。

「俺が知ってるの綾つて人間は、クラスの人間が話していた優しい
とか温厚とかがつくような人だけだ。決して出会いつて早々鳩尾を殴
つてくるやつじゃない。」

「あ、それそれ。それがあたし。」

「はい？」

返しが想定外すぎる。

え？ 何？ この人が例の完璧人間？

「学校つて一度変な噂流れたら止まらないじゃない。だからそういうふりをしてたのよ。優しい、温厚、とかね。」

「じゃあ、今は？」

「猫がぶつていません。」

あ、なんか俺、人間不信になるかも。今まで顔は見たことないけど同じ学年に性格最高、姿も最高という人間がいると思つてたのに・

・・。

それが一転。

天は「物を与えず、か・・・。そのとおりじゃないか。

「どうしたの？何か魂の抜けた顔になつているわよ。

「ちょっと人間不信になりそ�でな。」

「なんで！？」

「とりあえず、俺らがどんな状況にいるか整理してみよう。

清水・・・でいいのか？

ここはどこだかわかるか？

地面に折れた枝で絵を書いている清水に尋ねてみると・・・

「知らない。」

即答。

「なぜ、俺らがここにいるのかわかるか？」

「知らない。」

即答。

「時計はあるか？ 時間は？」

「知らない。」

即答。

「好きな食べ物は？」

「知らない。」

即答・・・。

「つて清水！俺の話聞いてないだろ！」

自分もわからないことを他人に聞くのもどうかと思つが・・・。

「知らない。」

「音声再生機か！」

「うわっ びっくりした。なによいきなり。」

やっと別の反応をしてくれた。

「いや、なによ、は俺のせりふだと思つんだが。話聞いてたか？」

「ええ。聞いてたわよ。」

「どんな話してた？」

「えーっと、あれよ。地底人がいるかどうかって話。」

「全然ちげえよ..」

やばい、この見知らぬ土地でこいつと二人きりつて異様なほど不安だ。

「頼む、学校の時みたいに猫かぶつてくれないか？まさかこんな願いを他人に言つとは思つてなかつた。ましろそっちのほうが一緒にいて安心できる。

「めんどくさい。疲れる。だるい。嫌だ。ことわ・・・」

「わかった。もういい。」

永遠に続きそうな断り文句を切り上げる。

その後また暫く話し、（案の定全然進まなかつた。）認めたくな
いまとめを言つてみる

「つまり、俺らはなぜここにいるか全くわからない。

なぜきたのがもわからぬ。

ここがどこかもわからない。でいいか?」

「何にもわかつてないじゃない。」

全く持つてそのとおり。

「反論が見つかりません。」

「よひしい。」

会話が進まぬ。

「なぜ、清水はえらそくなんだ?」

「なんとなく。」

疲れた。こいつと会話をするのは本当に疲れる。
顔とスタイルはいいのに・・・もつたいない。
まじまじと顔を見ると、

「なにこいつをじりじり見てるのよ。気持ち悪い。」
全くだ。

「いや、なんでもない。」

「言わなきや痛い目見るわよ。」

言つても痛い目見るんだろう。どうしようつか。

「あ、見てみてー。こんなとこに手じろな木の枝が・・・。」

長さ50?程の木の枝。

清水はそれを拾い右手で持ち、自分の左手のひらに打ちつけている。
打ち心地を確かめているのだろうか?
パシッ、パシッ、乾燥している木からいい音が聞こえる。
怖い・・・。この上なく怖い・・・。

よし、ここで一つ考えてみよう。

選択肢は2つ。

1つ、言わない。木の枝の餌食。

2つ、「顔とスタイルはいいのにもつたいない」と思つていました。

「と正直に言つ。木の枝の餌食。

穩便にすませる方法が見当たらない！

というより、どの選択肢でも変わらないのかよ。

なら、ここはダメもとで2つ目の選択肢だ。

「顔とスタイルはいいのに性格が悪いからもつたいない」と思つていました！」

「そこに座れ。」

失敗だ。余計に怒らせてしまった。

「すいませんでした。」

正座の状態から手をつき、地面まで頭を下げる。土下座だ。
この際、プライドよりも命のほうが大事である。
神様、俺をお助けください。

数秒後、頭を上げるとそこには・・・

木を手で持ち、その手を振り上げている清水がいた。

その手が
俺の頭にせまつてくる・・・。

俺は咄嗟に横に転がった。

すると、さっきまで俺がいた地面を木の枝が通過してえぐれる。
木は折れていない。

いつもなら頑丈な木だ。と褒めていたかもしれないが、状況が状況。
そんな暇は無い。

俺は起き上がり、
全力で、
逃げた。

一体どれだけ森の中を逃げただろうか。

ずっと帰宅部だったため体力はあるとはいえない。
でも女子に負けることは無いだろうと思つていた。

今日までは。

足の限界。走るのをやめる。

ずっと制服だつたため全身あせだくだ。息もあがつていて。

「疲れた・・・。わすがのあいつもこいまでは追つてこないだろう。

」
その場に座り込み、息が整うのを待つ。

しまつた。どう走ったかわからない。

落ち着くことでやっと気付いた事実。

冷静になつて考えてみるとここでの唯一の話し相手であるはずの清水とも別れた。

これは精神的にも結構やばいんじゃないか。という考えが浮かぶ。
うーん。これが大切な物は失つてからその大切さに気付くというやつか。

大切な物 話し相手・人間だ。そう考えていると無性に会いたくなつてくる。

その時、

「あんた最低ね。こんな森の中に女の子を置いて1人逃げるなんて。

」

俺が走ってきた方向から清水が現れた。

右手の枝は健在。目から怒りが感じられる。

前言撤回。会いたくなかった。

そもそも逃げる原因を作ったのはお前じゃないか。という反論はおいといて、

「どうやって追いついてきたんだ・・・？」

「は？普通に走つてだけど。」

「普通つて、俺、男子でもうすでに疲れているんだが。」

「体力ないわねー。私はまだまだ全然平気よ。」

俺、全然平気じゃありません。

それどころか体力女子以下つて結構ショック受けてるんだけど・・・

。そういうえば成績優秀つてことは体育もできることになるのか。

「いけない。忘れるところだつたわ。あんたさつきのこと忘れてないでしちゃうね。」

俺は覚えているが、清水には忘れておいてほしかった。

「イエナンノコトダカサツパリ。」

「覚えているわよね。」

やばい。笑つてる。この人笑つてるよ。笑つてゐるのに怖いよ。

「覚えて・・・ま・・・す・・・。」

脅迫に敗北。学校での顔は一体なんなんだ。

「よろしい。じゃあ覚悟してね。」

もう抵抗しても無駄だらう。それどころか体力はむしろのまづが上。

どう考へても俺に勝ちめは無い。

一体どうしてこうなつたんだ？

俺は授業を受けていただけなのに。

数分前まではまったく知らなかつた美少女に枝で殴られようとしている。

清水が枝を振り上げる。本日2回目だ。

ヒュンという音と共に振り下ろされる枝。それが俺の頭に当たる。バキッという木の折れる音と、爆発音が俺の頭の中に響く。

「は？ 爆発？」

殴られた痛みよりもそつちのほうが気になる。

「いつてみましょう。」

清水が折れた枝を捨て呟く。

「爆発音のした方向にか？」

「ええ。工事とかなら人がいるはず。まずはその人に聞いてみましょ。」

「お前にしては正論じゃないか。」

「それはあたしに対する悪口ととつていい？」

「ダメです。」

会話はこれで途切れ、俺ら2人は歩く。

爆発音のした方向へと。

異世界の理

爆発音の方へ走る。

工事でもしていくれるとありがたかった。この際、爆破実験でもいい。

修哉と綾がその場所に到着したとき、信じられないことが起こっていた。

そこにいたのは武装した軍隊。歩兵、弓兵、種類は様々。それと・・・。

「なに・・・あ・・・れ・・・？」

綾が正面から見て左にいる軍隊と別の方向をさす。
どうやら俺とは別のほうを見ていたらしい。
その指の先にあつたものは・・・。

人型といつていいのだろうか。全ての固体の身長は2m前後。全身がナスのように黒っぽい紫をしている。そして全身に、まるで、血管のように青い線が張り巡らされている。異様なのは色だけではない。遠目でもわかる。基礎は人型なのだろう。だが体のあちこちから、何か棘のようなものが突き出している。バラの棘のような形。しかし大きくて、禍々しい。肩の物もあれば、足、額、首、いたるところから棘が出ている。またそれらの棘も黒く、青い筋で彩られている。

一目でわかつた。

ここ地球じゃないじゃん・・・。

少なくとも俺の住んでいた地球にこのよつた生物はない。いたとしても軍隊が出動しているくらいだ。そこまでの危険生物がいたら嫌でも耳に入つてくる。

軍隊と謎の生物。2者が目の前で戦闘を繰り広げている。

人は剣、槍、弓といった道具で戦つてゐるが、謎の生物は違つた。彼らは軍隊の人間を踏み潰し、引き裂き、噛み砕いていた。

赤い噴水がいたるところで鮮血を吹き、それはここからでもわかる。それともう一つ、青い噴水も水を噴いていた。

「ここは地球じゃないの・・・？」

「わからない。」

「わかるわけがない。」

何？異世界へワープ？そんなことができないことなど、小学校ですでに知つてゐる。

しかし、現に俺らは地球では無いところにいる。

それは紛れもない事実。痛みを伴つため、決して夢では無い。

「ははっ。なんだよこれ。ビックリならもう成功だ・・・。」

あまりに頭が混乱して的外れな台詞しか出でこない。

さつきまでの俺たちは日本かどうかはわからないにしろ、地球上にいると思っていた。

なのに・・・田の前の現実。それが俺らの推測全てを否定していくつた。

「あなた達、ここで何をしているんですか？」

呆然としていた俺らに、押し殺された声がかけられる。

「聞いていますか？ 危険ですよ。」

そこまで言われてはつと我に返る。

振り返るとそこには人が一人立っていた。

性別は女性。身長は小柄で135？前後。また幼さの残ったかわいい顔立ち。真紅の髪を後ろでまとめ、ポニーtailにしている。夕暮時の太陽のような瞳をもち、色は日本人に似て肌色。服はRPGでみたような赤いローブを纏っている。手には彼女の身長を超えるほど長い棒の先端に赤い宝石を加工したと思われる珠玉を冠した杖を持っていた。

ようするに全身赤の幼女がいた。清水と同等の可愛さだ。
この子は暴力キャラには到底見えない。

「きみー、こんなところにいたら危ないよー。」

横で清水が猫なで声で話している。

おいなんだその声。なんだその台詞。さつきまでの混乱も感じられない。

『おい、清水、初対面の人に対してもっとなれなれしくないか？』
『いいのよ、かわいい子だから。』

基準がわからん。

なぜかわいいとなれなれしくなるんだ。

まあ、清水の考えがわからないのは、前の会話で立証済みだ。わざ

わざつひとつ必要もないだらう。

「おかしなことをいいますね。危ないのはあなた達のほうですよ。」

幼女が首をかしげて言う。

「どうしたことだ？」

「説明している暇はありません。すこし伏せていてくれませんか？」「とりあえずこの世界のことはこの世界の人任せみつと思い、俺は横にいる清水を説得。

むこうはむこうで『なんで伏せなきゃいけないのよ。』とか言つてきたがまあ、説得できたので気にしないでおく。

俺らが伏せたのを確認した幼女は、目を閉じ、歌つた。

それは、とても綺麗な歌声だった。

またその声は発せられると共に風に溶け歌詞がよく聞こえない。ずっと聞いていたら眠ってしまいそうなそんな歌声だった。

どれくらい聞いていたのだろうか。時がたつのも忘れ、聞き入っていたらしい。

彼女は歌い終わり、目を開けた。

そして謎の生物の方向を向き、杖を振る。

瞬間、謎の生物のいた中央付近の地面が、爆発した。

黒い固体が空中を舞う。

「…………」

「…………」

「…………」

謎の生物が空中に飛ぶと共に、俺と清水が動けないでいる。

爆発音の正体はこんなにも理解不能なものだったのか。

「爆発音……何をしたんだ？」

「火属性の高位魔法を使用しただけです。」

もうわけがわからない。

え？

魔法？

属性？

はたから見ると杖振って爆弾を爆発させたようなものなの。」

「そもそも魔法ってなんなんだ？」

「ええ！？ 魔法を知らないなんてビックリの田舎物ですか？」

そこまで驚くことなのだろうか。

「はたから見ると、爆弾を爆発させたように見えるんだが。」

「爆弾？」

話がかみ合っていない。

爆弾のことくらい小学校低学年。いやもつと前くらいから知つてそういうものなのに。」

「まあ、爆弾はおじといで、やっぱり魔法つてあれか？ 空飛んだり、瞬間移動したり。するやつ？」

「そんな便利な魔法があつたらいいんですけどね。」

残念ながら魔法は回復と攻撃の2種しかありません。まだ補助魔法は無理なんです。

唯一持ち上げるといつことはできますが。」

そうなのか。魔法つてそこまで便利つてわけでもないんだな。いや、相当便利か。あんなわけもわからない生き物と戦つてるくらいいだし。

ふと横に田をやると清水がいまだにフリーズしている。

肩を叩いて現実世界に呼び戻す。その途端、さつきの俺と同じ質問を幼女に対して聞いていた。

「2人ともここは危ないですから、本陣へ来ませんか？」

「本陣つて・・・あの軍隊の大将がいるところか？」

「ええ、この場合大将ではなく国王様が直々に指揮をとっていますけどね。」

国王自ら出陣って謎の生物はどれだけ強いんだよ・・・。

「こ」。あんたも来るわよね？」

「こ」に残つても流れ弾で死ぬか、あの謎の生物に殺されるかしそうだしな。行くよ。」

あ、そういうえば大切なことを聞き忘れていた。

「名前はなんていふんだ？俺は真島修哉、こいつらは清水綾だ。」
幼女に尋ねる

「私の名前は、フロントと申します。フロント・アヴォラス。」

フロントとよし覚え・・・

「よく間違われますが、私は今年で16歳です。では案内いたします。」

「え？」

「リピートブリーズ。」

なんか今どんでもないことを言つてたような・・・。

「案内いたします。」

「もう少し前。」

「16歳です。」

「本当に？」

「皆さん、そういういます。私は16歳に見えないって・・・。」

「この身長と見た目で16歳？」

半分くらいかと思っていた。

それよりも俺らと同じ年つてところに一番驚く。

「『めんな。もう少し幼いと思ってたんだ。』

泣きそうなのでフォローをいれるが、言つてから気付く。

これ逆効果なんじゃね？

「そうですよね。グスッ、どうせ私は小さくなりますよ。」

本格的に泣き出してしまったー。

横で清水が『あんたさいてー』という顔でこっちを見ている。

『悪かった。本当に悪かった。』と何度も言つても涙は止まってくれない。

それにしてもないてる時可愛かつたよなー。

俺の中の自分が目覚めてしまうかも。

フロトに案内をしてもらい、本陣へ向かう途中、俺らはいろいろなことをフロトに尋ね、覚えた。

まずこの世界だが、サンテリウスというらしい。

見つかっている大陸はここだけ。といつより海をわたる技術がないそうだ。

よつてここにはサンテリウス大陸とよばれている。

身分を持つのはほんの一握りの人間だけで、他は全員平民。

次に魔法についてだが・・・聞いたところ、

才能のある人間にしか使えない。才能には魔法そのものの才能という概念はなく、各属性への適正は個人で異なるといつ。雷は使えるのに、炎は全く使えない。そういうたものだ。

また魔法には精神力（＝生命力）を多量に要し、使いすぎるとしに至ることもある。威力は高いがリスクも高い、諸刃の剣だ。

また精神力は時間経過と共に回復する。

魔法＝技術であるため魔法を使える人間にはさまざまな権限が与えられているといふ。

攻撃魔法は、自然に存在するあらゆるエネルギーを力に変換させているらしい。

回復魔法は傷を瞬時に癒すのではなく、長い時間をかけて徐々に傷を癒していくものである。しかし魔法に必要な精神力の問題もあり、最近では薬を使うこともあるとか。

科学は全く発達していなく、そのため移動手段も限られる。
重い荷物は魔法使いが何日もかけて運ぶらしい。

魔法に詠唱はいらない。集中するために歌う程度。

以上が知ることのできたことである。

いろいろあつたが案内をしてもらい本陣に到着。

「でっけー。」

石を積み上げて作った壁の内側に、これまた石で作られた城。豪華さは全く感じられないが、守りには適しているそうだ。ずっとテントのようなものが並んでいるところと考えていた俺は馬鹿だ。と痛感する。

最深部の部屋に到着。

「ここで少し待っていてください。」

「ああ。」

軽い返事。

「呼んだら入つてきてください。」

と忠告をしてフロントセードアの中に入つていった。

「なあ、清水。」

「何？」

「俺、どうなると思つ。」

「知らない。」

「だよなあ。わかるわけない。情報が少なすぎる。」

そもそもこの地の世界観もいまだにわからない。

わかっているのは魔法の使用が可能などと、謎の生物の存在。それに関連して軍隊の存在。

情報とつていいのかはわからないが

フロントとつ少女。

「地球にもどれるのか。」

今まで心の中で思つていたことを口に出してみる。

「・・・・・。」

清水はうつむいて何も喋らない。

人生、どうでどういうふうに転ぶかわからない。
ふとその言葉が脳裏をよぎる。

地球の・・・日本にいるうちは少なくとも安全だった。

目の前で戦争を見た今となつてはどうだ。しかも謎の生物までいる。
この先、安全の保証は一切ない。

俺らはなぜ、この世界にいたか。
それすらもわからない。

ただこの先が不安で、不安でたまらなかつた。

「入ってきてください。」

ドアが開きフロートの声が会話のない廊下に響く。

それが全てのスタート地点。
物語のスタート地点。

形持たぬ者

「入ってきてください。」

フロトに呼ばれその部屋に入ると、見たことも無いような光景が広がっていた。

壁は外から見たものと同じ色の石で作られている。

ドアの入り口から一番遠くの椅子にまで届くほど長い絨毯。その下に明かりを反射して光るまで磨き上げられた床。

その絨毯の両脇に鎧、ローブ、俺らでも着るような布服をきた人間が、縦一列にズラツと並んでいる。その人達の目が俺らを捕らえて離さない。

中学校の卒業式なんかよりはるかに沢山の目がこちらを見ている。言葉が発せられないことが、より一層、迫力に磨きをかけている。何か怪しいことをしようものならすぐ殺されそうだ。

「国王様、この者達がさきほど説明した者でござります。」

フロトはその視線を一切気にせず、一番奥に座っている男の前に行き、片足の膝をつき手を胸の前で合わせた。

「きみらが・・・。」

フロトが国王と呼んだ男が（いや実際国王なんだろうが、）立ち上がり、こちらを見てくる。

髪の色が茶色。いや、少し白い。顔にも、しわがある。けっこつ年をとっているようだ。

『王の御前です。無礼、無きよつ。』

フロトが呟く。

これは俺らに言つていいのだろ？

現に俺らは王の前で、礼儀も何も無くただ突っ立つていただけだから。

『フロートと同じような姿勢になつて。』
『はあ？ なんであたしがそんなこと……』
『この場所で一番偉い人だろ。』
『それは、まあそうだけど……』
『いいよ。やりたくないなら』

清水と小声で短い会話をしてから俺はフロートを真似る。

『ああ、もうやればいいんでしょー。』
納得したのだろうか。それとも俺とフロートがそういうから、
やりやるを得なくなつたのか。
『せよ、突つ立つたままではないのよしじょづ。』

ほんの少しの間の沈黙。

最初に口を開いたのは国王だった。

「まず一つ。きみらに言いたい。……すまなかつた。」

え？

なんで王様が謝つてるの？
俺と清水はなんかやられたの？
横を見てみると、清水も首をかしげている。
俺同様、なんのことかわからないらしい。

「えつと、なんのこと？
間違つた。何のことでしょうか？」
敬語、敬語、自分に言い聞かせる。

「？　きみ達はあそこにあつた村の住民ではないのか？」

「いえ。」

「じゃあ、旅人か何かか？」

「いえ。」

「話がかみ合つていない

この世界に来てから、こういうことが多いな。」

「それよりもまずは、なぜ謝られたのか知りたいです。」

「ああ、そうだつたな。」

あそこには村があつた。小さな、小さな村だ。

だが、北で『形持たぬ者』が現れてな。

そいつらはまず周辺の村を襲つた。

都市も襲つた。

わしは国を治めるものとしてこれ以上、被害を出すわけにはいけなかつた。

よつて、軍隊を編成し、討伐を始めた。

しかし、彼らの力は強力だつた。わが軍は徐々に後退を続けた。
そこで最終防衛ラインとなつたのがあそこだ。

わしはそこにいた村民を都市に家を与え引越しを促した。

大半のものがそれに従つた。

村民の全てが非難した時、

旅人も、

商人も、

誰も危険な目に会わぬようこの区域への立ち入りを禁止した。

わしはフロトから君らが森にいたと聞き、
もしかしたら逃げ遅れたか。と思つたんだ。

よつて謝つた。

わしの力及ばぬゆえにきみらを危険な田に令わせてしまつたんじ
やないかと思つたから。

王の話はそこで途切れた。

王は俺らを危ない目にあわせてしまつたと思い込んでる。

俺らが、立ち入り禁止区域にいたのは、この人のせいではない。

俺らは違う世界から来たのだ。

その到着点がたまたまあそこだつたというだけ。

しかし、立ち入り禁止区域に人がいても、そのような発想はまず浮
かばない。

「王様、それは違います。私達は気付いたらあそこにいたんです。
俺がどう説明すればいいのか迷つていてることを清水が説明をしてく
れた。
だが、そんなこと言つても誰も信じてはくれないだろう。
むしろ馬鹿じやねえの?と思われるくらいだ。

考へてもみてほしい。

自分の目の前にいきなり、私異世界からきましたー。って言う人
が現れたとしよう。

はたして、それを信じるのは何人か・・・。

100人いても1人信じる人がいるかいないか。いたとしたら、その人は詐欺に要注意だ。

昨日までの俺なら絶対に信じない。

見てみる。

王様も首をかしげて、どういうことだ？つていう顔してゐるぞ。

「だから、違う世界からきたんです。」

これ以上、場を余計に混乱させること言わないで・・・。
フォローが見当たらない。

仮に嘘でもいいからリアリティのある説明をしようとする
あの森に住んでました。 王様がさつきみたいに謝る。
間違つて入りました。 僕らが悪者みたいになる。

真実はどちらも悪くないが、信じてもらえない。

嘘は信じてもらえるが双方どちらかが悪いとこうことになる。

「よし、きみらの話。信じよう。」

信じちゃつた。王様が長い考察の上で信じちゃつた。

ここ数行の俺の考えたこと全部無駄じゃないか・・・。

「フロント。この者達の世話をフォーグルしてくれ。任せた。」

なんだかんだで保護者が決まつてしまつた。

それよりも、同じ年が保護者つて・・・。

まあ、俺らはこの世界については小学生以下の知識しかもつていな

い。

保護者は必要だろ。

そういう意味では、趣味とかが合うかもしれないから良い人選だ。

それに可愛いし。

ロリコンというわけではない！フロトは同じ年だ！心の中で宣言。見た目まんま幼女なのに・・・。これ口に出したらまた泣かせてしまうだろうなあ。いや純粹に命が無くなるかもしれない。だつて魔法使いだし・・・。爆発させてたし・・・。
『命大事に』だ！

・・・・・フォーグルって誰？

フロトに案内されて階内の一室に辿り着く。ここが戦時に使う部屋のようだ。

「おかえり。」

ドアが開くなり中から声が聞こえる。

「ただいま。父さん。」

どうやらフロトの父親らしい。

「紹介するわ。2人は真島修哉。清水綾。

王の指示でこの2人の面倒を見ることになつたけど大丈夫？」

「問題ない。家族が増えるのはいいことじや。」

「ありがとう。父さん。」

どうでもいいけど敬語を使わないフロトをはじめて見た。
新鮮な感じがする。

フロトは続いて俺らのほうを向き、紹介してくれた。
「この人が私の父、フォーグルです。」

フォーグルとよばれた彼は白髪の老人だった。
切れ長の目。それであつて優しさを感じさせる。口角は若干上がり
ていて、微笑んでいるようだ
俺たちの保護者・・・

優しそうな人よかつた・・・。ほつと胸をなでおろす。

フロトの話によると、彼はフロトの育ての親らしい。
なんでも、小さい時に両親は他界してしまったとか・・・。

気がつくとフォーグルの手が目の前にあつた。
俺はその手に自分の手を重ねる。
握手か・・・。

「よろしく。わしはフォーグルだ。身分は平民。現在は軍の情報整
理官を務めておる。」

軽い自己紹介を終わらせてから俺らは円卓を囲んで話を始めた。
「一つ質問ですが。真島さんと清水さんは本当に異世界からやつて
きたんですか？」

真っ先に聞いてきたのはフロトだった。

そういうえば異世界から来たっていったのは王の前が初めてだな。

「異世界から来たのは本当だ。授業を受けながら桜を見てた」「ここに来た。」

「あたしもそんな感じよ。桜を見てたわ。あの授業退屈なんだもん。」

「授業と桜。

これは共通点か？

フロントが疑りの目でこちらを見ている。

「疑っているのか？」

「イエ。ウタガツティマセン。」

棒読み・・・思いつきり疑っているな。

まあ、信じろって言うほつが無理な相談なんだろ？が・・・。服は全然違うもの着てるんだけどなあ。

俺ら制服だし・・・。

そのときポケットの『』に何かが脚に触れた。
ちょっとした重量。

ん？これは・・・。

それをポケットから取り出し全員に見せる。

「あんた、それ・・・。」

横で見ていた清水が驚いている。

直方体の物体。

「おう、紛れもない携帯電話だな。清水は持っていないのか？」

「校則違反だから。」

みんな普通に持ってきているんだが・・・。

さすが猫かぶりだ。

自分にとって都合が悪くなることはしないんだね？」

「電話はかけられないが、光るし、音出るし、

科学が発達してないらしいこの世界では証明には十分だろ？」

そういうと俺はアラームを1分後にセットして机に置く。

フロトとフォーグルは頭の上に『?』を浮かべている。

そりやあ そうなるだろ。見たことも無い電子機器だからな。

1分後、

音楽と共に、朝です！朝です！と告げる電子音が部屋に響いた。

フロトとフォーグルは最初こそ驚いていたが今は目を見開いて携帯電話を見ている。

「信じてくれたか？」

おそるおそる尋ねる。これで信じてくれなかつたら……もう信じてもらう術は無い。

「信じざるを得ません。」

2人が声を揃えて頷く。

ちょっとした達成感が心の奥から込み上げてくる。

ついに俺は信じさせてやつたぞ。

どうでもいい達成感はおいといて、

「フォーグルさん。あの黒い生き物は何ですか？フロトはよく知らないらしいんですけど……。」

ここに来るまでにこの質問はフロトにもしている。

しかし、魔法のことはわかっているのに、謎の生物のことはわからぬいらしい。

「あの生物ですか……。

結論から言つと、いまだによくわかつていません。

ある日、大陸の北部で大量に出現したという報告だけです。

彼らの嫌なところはですね。その力とその量にあるのですよ。

地を人の倍の速さで進み、表皮は硬くほとんど剣が通らないんです。破壊本能のままに動くため、人と違い容赦なく相手を殺します。1体に対して3人の屈強な戦士で挑んでやつと互角でしょう。

更に数に限りがありません。何体仕留めようとも、次から次へと沸いてきます。

北方には少し前まで大陸最強と謳われた軍事国家が存在していたのですが滅ぼされてしまいました。要因は先ほどいった反則今までの強さです。多數精銳とでもいいましょうか。

また彼らは種族ごとの特定の形を持たないため、『形持たぬ者』と呼ばれております。』

そこまで言つてふつとフォーグルは顔を曇らせる。
そして重く、低い声で続けた

「過去にも『形持たぬ者』と人の間で行われた戦争があつたんですね。」

自分の居場所

「過去にも『形持たぬ者』と人の間で行われた戦争があつたんですね。」

フォーグルの言葉は過去現れた『形持たぬ者』がいままた現在、現れたことを意味している。

過去に出現して、この間まではいなかつた。

一体どうしたことだ？

フォーグルは立ち上がり室内の隅にある本棚へ行き、本を一冊とりだした。

それを俺たちのいる円卓の中心で開く。

フォーグルが言葉を続けた。

「過去・・・今からざつと3000年ほど前になりますか。形持たぬ者の出現が歴史書に出てくるのはそれからです。

しかし、不思議なのですよ。その記述がされてから今まで、一度も形持たぬ者は歴史に出てこない。

わかりますか？

3000年もの間、形持たぬ者は何をしていたのか。もしくはどんな状態にあつたのか。

全くわからないのです。」

本の行を追いながらフォーグルは、説明をしている。

「その戦いの結末はどうなつたんですか？」

思い切って尋ねてみると、すると信じられない答えが返ってきた。

「人が勝つた。」

問題はその先・・・

「異世界からきた人間によつて決着がついたのだ・・・」

その言葉を聴いた途端、俺は・・・瞬間に鼓動が速くなるのを感じた。

過去にも俺と清水と同じ状況に立たされた人間がいる。

それだけで十分。

不安が体から抜けていく。

おそらく、王様もこのことを知っていたのだろう。だから俺らの説明を信じてくれた。

「その異世界から来た人は元の世界に帰ることができたのですか？」

「わからない。そこまでは記されていない。ただ、・・・こう書かれてはいる。」

異世界から來た者は4人。

男3人。

女1人。

男の1人は形持たぬ者との大戦後に処刑。

また1人は何者かに襲われて死亡。襲撃者は不明。

女は大戦により戦死。

残った1人の男はその風貌、戦いのスタイルから『炎獣の化身』と呼ばれた。

「4人の内、3人はわかるだろう・・・。
もう1人・・・炎獣の化身はどうなつたのかわからない。」
フォーグルが告げる。

4人の内、3人も死んでいる?
残つた1人も不明・・・。
地球へ戻る方法はわからない・・・か。
せつかくてがかりが見つかつたというのに・・・。
3人はこの世界で死んでたなんて・・・。

「終わった・・・。
終わつた・・・。」

帰る方法はわからない。4人の内、3人も死んでしまつていた。
それはつまり、彼らは最後まで帰る方法を見つけることができなかつたのだろう。

形持たぬ者に勝つ力があつたとしても、地球に帰る方法はなかつた。

チェックメイト・・・だ。

これからどうすればいいんだろうか。
どうかで農業なり工業なり商業なりをして生きていこうか?
その場合、まずやり方を覚えるところから始まるのか。大変そうだ
な。

軍に入つてあの化け物と戦うか?

無理だな。俺にはそんな力は無い。

俺はどこにでもいる一般的な高校生だ。

俺がこれから的生活について考えを巡らせてみると、清水が椅子から立ち上がり言い放つた。

「まだ、終わってない。

その残つた1人についての情報を探せばいいじゃない。

この人たちがこの世界における私達の先輩なのよ！

諦めるのは、先輩の残したものを行なにかしら探してからでしょ。」

「清水・・・。」

俺の言葉を最後に直後訪れる沈黙。

まつ先に沈黙を破ったのはフォーグルだった。

「清水さん。そのとおりだ。

この世界では知りたいことが身近なもので理解できない場合、旅に出る。

わしも昔は、よく旅に出たものだよ。

君達も、旅出つてみるといい。

その結果、過去を繰り返すことになるかはわからない。

だが、何もしないよりはいいだろう。」

過去を繰り返すといつのは俺らがこの世界で死ぬことを意味しているのだろう。

つまり、死ぬかもしれないけど、それしか戻ることのできる可能性は無いということだ。

虎穴に入らずんば虎子を得ず。ということとか。

しかし、炎獣の化身なる人が地球に戻れたとは限らない。その人もどこかで死んでいるかも知れない。

・・・でも、帰れる可能性が1%でもあるのなら、

俺はそれに賭けてみたい！

「俺も賛成だ。どうせこの世界で俺らが生きていくのは難しい。戦争もあるしな。」

「君達2人は本当にそれでいいのか？
旅に出たとしたらどこで形持たぬ者に出会うかわからない。
出会ったとしたら、君達は自分で自分の命を守らなくてはいけない。
その覚悟はできているのかい？」

「フォーグルさん。

勿論、俺は死ぬのは怖いし絶対に嫌だ。
だけど、俺らがこうしている間にも地球では
家族が心配しているかもしだれない。
友だちが心配しているかもしだれない。

家族と友だちつてさ。いつも一緒に話して、笑つて、馬鹿なことして、
時には喧嘩にもなるけどさ・・・
それでも一緒にいたって思うんだよ。
会えなくなると悲しいって思う。
あそこは、こんなにも居心地のいい場所だったんだ。
俺のいたい場所はここじゃない。
だから俺は探す。

自分の居場所へ帰るために。」

「あたしもおんなじ。地球に帰りたい。だから旅に出る。」

清水と意見が一致した。

そんな俺らを交互に見てフォーグルは言つ。

「そこまで帰りたいのなら、もう止めはしない。だが、約束してほしい。

『絶対に死なない』と・・・。

真島君が言ったとおり、私も家族と会えなくなるのは悲しいから。真島君が言つたとおり、私も家族と会えなくなるのは悲しいから。ん?不思議そうな顔をしてるね。

きみらは、紛れも無く私の家族だよ。

サンテリウス王にきみらの世話を任せられたときからね。

だから、会えなくなるのは悲しい。

それとフロト。

きみも一緒に行きなさい。そして真島君達を守りなさい。

大丈夫、軍にはわしから話をしてもぐ。」

「わかりました。2人についていきます。」

フロトも一緒にきてくれるのか。

正直、不安がかなり消えた。半減などとこうものではない。80%くらいも消えた。

だつて、爆発させる魔法使えるからな。

「さて、旅立つきみ達に餞別といつては難だけじゃつプレゼントをしようじゃないか。」

そういうとフォーグルは部屋にあった2つの袋を俺らに一つずつ渡してきた。

「開けてみなさい。今のきみたちに必要なものが入っている。」

指示に従い袋を開けると中には、

茶色い皮製の鎧と短い剣が入っていた。

鎧はかなり使い古されているようで、いたるところが傷ついている。剣はいたるところが刃こぼれしていたが、今にも折れそうというほどではない。

清水の袋にもおなじ物が入っている。

「性能は低いが無いよりはましだろう。もって行きなさい。本当は軍の使う武防具をあげたいのだが、今は前線でも武防具が不足しているんだ。

だから私の一存で渡すことはできない。許してくれ。」

「謝りないでください。これをもらえただけでもとても心強いですよ。」

お世辞ではなく本当に心強い。
素手と剣なら剣のほうが絶対にましだし、鎧も制服を着て戦つよりはよっぽどましだらう

「もう言つてくれるとありがたい。

それでもう一つのプレゼントだが……ついてきなさい。」

やがてフォーグルは一つのドアの前で立ち止まつた。

俺、清水、フロトはただそれを追つ。

やがて言つとフォーグルは部屋を出て歩き出す。

自分の居場所（後書き）

正直、誰も読んでくれないだろうなあ、と思つていたのですがその予想は外れました。

想像以上の人人が読んで下さつて いるよう です。まあ 初期予想が 1 行 だろ うな あ で し た し ・・・。

読んでくださつて いる方々、このよ う な 小説に 時間をとつてくれて ありがとうございました。

感想、評価して くれると ありがたいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6614z/>

異世界への迷人

2011年12月25日18時51分発行